

【書 評】

米 川 伸 一

『東西紡績経営史』

同文館 1997.2 vi+334 ページ

1

本書の書評を書くとする者は、まず、そのやや特異な構成について言及せざるをえないであろう。この点を明確にするために、本書の目次を、各章のもととなった初出論文の発表年次(括弧内に表記)とともに、掲げておく。

序

Part I 東西紡績経営史

- Chapter 1 各国紡績企業成長の経営史的解明
——イギリス, アメリカ, インド,
日本—— (1982年)
- Chapter 2 紡績業における企業成長の国際比較
——イギリス, アメリカ, インド,
日本 1870~1930—— (1978年)
- Chapter 3 戦後繊維企業の成長と戦略
——比較経営史—— (1983年)

Part II 経営史の研究動向

- Chapter 4 イギリスにおける企業史研究の伝統
(1973年)
- Chapter 5 比較経営史への道程 (1978年)
- Chapter 6 ドイツ民主共和国における経営史学
(1973年)
- Chapter 7 経営史学における企業者と経営者
——チャンドラー著『経営戦略と経営
構造』をめぐる—— (1965年)
- Chapter 8 イギリスにおける経営史研究の新動向
(1966年)

Part III 欧文論文

- Chapter 9 University Graduates in Japanese
Enterprises Before The Second
World War (1984年)
- Chapter 10 Champion and Wood land Norfolk:
the Development of Regional
Differences (1977年)
- Chapter 11 Recent Writing on Japanese Eco-

conomic and Social History (1985年)

- Chapter 12 The Development of Chinese and
Japanese Business in an Interna-
tional Perspective: A Bibliogra-
phical Introduction (1982年)

あとがき

一見してわかるように、本書の構成は、各Partごとの主題や性格が異なる点、各Chapterのもととなった論文の初出時期が1985年以前である点、および日本語表記の部分と英語表記の部分とが併存する点において、通常の研究書の構成とは異なるのである。

2

本書がやや特異な構成をとるのは、筆者の「病前の研究の集大成」(317頁)だからである。筆者である米川伸一氏は、1987年に大病を経験された。本書は闘病の書であり、未来へ向けてあくまで経営史研究を究めんとする決意の書なのである。

本書に英語表記のPart IIIが特設されている理由は、「あとがき」の中の「ロンドンで多くの友人をえ、ヨーロッパから日本の学界状況をみる機会をえた私は、当時の日本の学界が全く孤立した世界であることを知り、時に行われる雲の上の議論であるような『論争』にも興味を覚えず、ひたすら名の通った英文の学会誌に専門外の日本経済・経営史に至るまで、(…中略…)執筆したのであった」(318頁)、という文章から、ある程度窺い知ることができる。そして、その「あとがき」は、「再びレフリー制である学会誌に論文を採用して頂いて有終の美を飾りたいとせつに希望している次第である」(321頁)、という言葉で結ばれている。本書を読み終えるときわれわれは、筆者のあくなき学究心、迫力ある前向きの姿勢に、圧倒されざるをえないのである。

3

さて、本書は『東西紡績経営史』という表題を有する研究書であるので、残る紙幅を、紡績業の比較経営史にかかわる部分に対するコメントに費やすことにしたい。コメントは、あえて方法上の批判とでも言うべきもののみにしぼり込むと、以下の2点に集約される。

第1は、綿業企業の同時代的国際比較を行なう際に肝要な論点となるはずの世界市場を舞台とした企業間競争が、十分に論じられていないという点である。筆者は、比較経営史の枠組みに関する「最大の論点は、比較の同時代性が同段階性をめぐってである」(150頁)と指摘したうえで、この論点について次のように結論づけている。

「綿業企業の比較経営史研究において、関心は同時代綿業企業の国際比較に向けられる。なぜならば、各国企業は世界市場の形成に参加し、彼らの将来を決定したものは、その市場競争にほかならなかったからである。彼らは、相互に世界市場を通じてかかわり、規定し合う。これが同時代的国際比較の現実的基盤にほかならない」(150頁)。しかし、本書においては、綿業企業の「同時代的国際比較の現実的基盤」となるはずの世界市場をめぐる企業間競争に関して、ほとんど分析が加えられていないのである。

筆者の紹介によれば、鐘紡の武藤山治は、外国紡績企業と互角に競争するためには、日本の紡績企業の合同運動を展開しなければならないと主張した、とのことである(224-225頁)。そうであるとすれば、戦前日本の紡績企業の経営行動を特徴づけた活発な企業合同(58-60頁)をもたらした一つの要因は、世界市場をめぐる国際的な企業間競争のあり方に求められるべきだということになる。ところが、筆者は、各国の紡績企業の経営行動の差異は、それぞれの経営風土の違いやその中での「主導企業」と「追従企業」との関係の違いによるものだ、と説明している(150-151頁)。つまり、本書では、国際競争を出発点にして各国の紡績企業の経営行動を解明するという視角は、事実上等閑視されているのである。

ここで指摘したコメントは、比較経営史(厳密には国際比較経営史)から国際関係経営史への研究の深化という、最近の日本の経営史学会の流れに沿ったものである。この流れを作る出発点となったのは1986年の経営史学会第22回大会での中川敬一郎氏の問題提起であるが、同大会の討議報告を『経営史学』第22巻第1号にのせた桑原哲也氏は、「比喩的に表現すれば、国際関係経営史は、比較経営史が『米国はそうであったが、日本はこうであった』という側面を問題とする^(ママ)に対し、『米国はそうであったので、日本はこうならざるを得なかった』あるいは『米国はそうであったので、日本はこうなり得た』という発展の側面をとり上げるのである」(同誌72-73

頁)、と伝えている。つまり、比較経営史から国際関係経営史への転換のポイントは静的分析から動的な分析への転換に求めることができるわけであるが、紡績業経営史の国際的研究を深化させるうえでも、この視点の転換を実現することは重要である。ところで、動的な分析を行うことは、別言すれば、「国際競争を出発点にして各国の紡績企業の経営行動を解明する」ことである。ここで指摘した第1のコメントは、綿業企業の同時代的国際比較を行うのであれば、比較経営史的視角から国際関係経営史的視角へ研究の視点を転換すべきだという、方法上の提言に置き換えることができる。

第2のコメントは、本書でキーワードとなっている「経営風土」という言葉の意味合いが、やや曖昧だという点である。筆者は、本書の6-7頁で、経営風土について「企業経営の戦略を決定する経営者組織からみた場合、当面与件として考えざるをえないような」ものと説明し、その構成要素として、各国の現行法、金融構造、国内市場の型、消費構造などをあげている。そして、「企業成長を規定する主体的・内的条件」が経営風土とは別に考察されるべきだと主張し、主体的・内的条件の考察を通じて「革新的企業、模倣-追従企業、現状墨守企業の3類型」が析出されることになると、見通しを述べている。ところが、149頁においては、第1次世界大戦直前の日英の経営・産業構造の違いにふれて、「競争力の強い企業の経営政策に他企業がきわめて迅速に対応する経営風土の社会と、一般に強力な指導的企業が存在しない産業社会(これらはそれぞれ当該時期における日本とイギリスの綿業界に妥当する)では、長期的に当該産業構造のあり方は大きく異ならざるをえないだろう」(圏点は引用者)という見解を、筆者は展開している。つまり、ここでは、圏点を付した部分から明らかのように、経営風土と企業の主体的・内的条件との区別は消滅してしまっている。端的に言えば、本書の経営風土の概念規定には曖昧さが残り、そのことが、経営風土と企業の主体的条件との関係の理解を困難にしているのである。

経営風土と企業の主体的条件との関係如何という論点は、現在、日本の経営史学会が直面している問題とあい通じるものがある。既に別の機会に指摘したように、最近になって「制度変革に企業は従う」というメッセージをもつ比較経済制度分析が登場するに至ったが、それは、制度をも変革する企業の主体的活動に光を当てる経営史学の方法とは根本的に

背反するものであり、大袈裟に言えば経営史学のレーゾン・デートルを問い直すものである(橘川武郎「戦後日本経営史研究の新視角」『経営史学』第32巻第2号、参照)。評者がここであえて第2のコメントを提示したのは、その内容が、上記のような大問題につながっていると考えたからである。

4

国際関係経営史の台頭にせよ、比較経済制度分析の登場にせよ、筆者が大病を経験されて以降に本格化した事象である。従って、これらをふまえていかなる立論を展開するかは、研究者として再起された筆者の米川伸一氏がこれから答えを出すべき問題である。われわれは、筆者の今後の研究活動から目を離すことができない。

[橘川武郎]